

知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 [ココナッツクラブ]

COCONUTS CLUB

JUNE
2018

6

テレビ・ネオジエネレーション

「ちった光、まもなく始動」



テレビ・ネオジェネレーション ～ちった光、まもなく始動

CCNCでは今年12月から光サービス「ちった光」をスタートさせる。

この新たな取り組みはどういうものなのか。

少し懐かしい話を交えながら、ここに至るまでのテレビ技術の歩みを辿ってみよう。

覚えていますか？ 昭和のテレビ

今年はテレビの放送が開始されて六十五年目になる。なんとも長い年月のようにも思えるし、日常生活における存在感を考えると、まだそれだけの年月しか経っていないのかも思える。

しかし、登場から六十五年で4Kテレビの時代まで到達したことを考えると、猛スピードで進化したメディアであることは間違いない。世代によって「テレビとの遭遇」経験は全く違うものではないだろうか。また、影響を受けてきたテレビ番組も世代ごとで大きく異なるはず。年齢の違う者同士がテレビについて語りあつたら、きっと噛み合わないことこのうえないだろう。それを承知で、個人的なテレビの思い出を少し綴ってみよう。

筆者は、テレビ放送開始からおおよそ二十年後の昭和四十六年生まれ。初めて見たテレビ番組がなんだったのかは覚えていないが（ピンポンパンだったか、おかあさんといっしょだったか）、家に置いてあったテレビの形は覚えている。重厚な木の枠にブラウン管が組み込まれたもので、いわゆる「家具調テレビ」というやつだ。そしてもう一台、祖父母

の隠居部屋に小さな白黒テレビが置いてあり、一緒に時代劇をぼんやりと眺めていた記憶がある。

筆者が子供の頃のテレビには、二つのツマミが付いていた。ひとつはガチャガチャ回すと数字ごとに止まるもの、もうひとつがラジオのようにスーッと回るもの。前者は「VHF」用で、1（東海テレビ）・3（NHK総合）・5（CBC）・9（NHK教育）・11（名古屋テレビ）のチャンネル。後者は「UHF」用で、35（中京テレビ）と25（テレビ愛知）にチューニングしていた。

我が家は目の前に山があつたのでUHFの映りが非常に悪かった。巨人ファンの父が中京テレビで放送されていた巨人戦を見たいがために、よく屋根に上つてアンテナの角度を調整していたものだ。「そこまでして見たいか？」と子供ながらに冷めて見ていた筆者は逆にアンチ巨人になり、いまだにそれが続いている。

記憶にある番組、報道、CMは枚挙にいとまがない。小学二年生のときに始まったドラえもんや、当時すでに長寿番組だったサザエさんなど、いまだに放映されているアニメすらある。それをいま小学一年生の息子が好んで見ているのだから不思議な気分だ。

暮らしに欠かせないテレビが時代を見つめ、時代を作る

テレビ放送の始まりは、終戦から七年半を経た昭和二十八年（一九五三）。まず二月一日にNHKが本放送を開始、八月二十八日に開局した日本テレビ放送網が続いた。当初はテレビがとんでもなく高額で、庶民がおいそれと買えるものではなかった。初期のテレビの価格は17インチで二十五万円、14インチで十八万円だったという。大学卒のサラリーマンの給料が手取りで一万五千円の時代だ。

そのような中でテレビ局が力を入れたのが、街頭テレビである。日本テレビは開局と同時に新橋駅西口広場、浅草観音境内、東急渋谷駅構内など東京都内および近郊の五十三か所に設置する。そこに集まった人々は、瞬時にテレビという新しいメディアの虜になった。そこから街頭テレビは日本中に広まり、最終的には三百か所に設置される。名古屋にも設置されたので、記憶にある年配の読者もおられるのではないだろうか。

当初、テレビで放映されて人気を博したのは、ボクシング、プロレス、大相撲などの格闘技だ。昭和二十九年（一九五四）に開催された力道山&木村政彦VSシャープ兄弟のタッグマッチは、日

本中を熱狂させた。テレビ放送が始まった頃から中継されていたプロレスは、以後数十年にわたり民放の目玉コンテンツのひとつとして定着する。そういえば筆者が小学生だった頃、金曜のゴールデンタイムにプロレス中継が放映されていた。それを熱心に見ていたのは我が家では祖父と祖母だけで、横目で見つ「なぜ年寄りなのにプロレスなんかで興奮するのだろう？」と疑問に感じていた。それはきっと、祖父母がテレビ草創期のプロレス中継の洗礼をもろに受けた世代だったからだろう。

テレビが爆発的に普及したきっかけは、昭和三十四年（一九五九）の皇太子殿下と美智子妃殿下の御成婚だ。このとき、皇居から東宮御所まで行われたパレードがNHKと民放で生中継されたのだが、これを視聴しようと多くの人々がテレビをこぞって購入したのである。テレビでは「五〇〇万人の人がこの慶事を、目撃したという。この時期は高度成長期の真っただ中で、国民所得がぐんとアップしたこともテレビ普及を後押しした。

昭和三十年代から四十年代にかけては、カラー放送の開始や衛星中継の開始など、テレビの世界にとってエポックメイキングな出来事がいくつもあつた。最初の衛星中継は衝撃的で、昭和三十八年（一九六三）、ケネディ大統領の

演説の実験放送だったのだが、最初に届いたのはなんと「ケネディ大統領暗殺」のニュースだった。予想外の展開はある意味、テレビ的ともいえる大事件だった。

日進月歩で進化するテレビだったが、その一方でまだいくつかの問題を抱えていた。ひとつはチャンネルの数が都市と地方で差がありすぎることで、そして、地形や建造物のせいで電波が届きにくい地域が存在することである。前者については、近距離での使用に適した「UHF」という電波帯の使用が認可され、各地にUHFのローカル民放が続々と開局することで解消に向かう。後者については、ケーブルテレビがその任を負った。その経緯については、本誌2017年1月号「ケーブルテレビが始まったころ」で詳しく紹介したので、お持ちの読者は参照してほしい。

長年活躍した同軸ケーブルからいよいよ光ファイバーへ

今更ではあるが、ケーブルテレビはどのような仕組みなのだろうか？

簡単にいえば「有線テレビ」である。従来の放送が、電波を飛ばして家庭のテレビに映像を送る仕組みであったのに対し、こちらは、ケーブルを通じて家庭のテレビに映像を送る。電波だと、

山や建物などの障害物があると受信できない場合があるが、有線を使えばそんな心配は無用だ。

かくしてケーブルテレビが世に生まれた。昭和三十年（一九五五）に群馬県伊香保町（現渋川市）でNHKの共同視聴用としてケーブルテレビが開設されたのがその端緒。昭和六十二年（一九八七）に初めての都市型ケーブルテレビ「多摩ケーブルネットワーク」が開局したのを皮切りに、地域に密着した自主番組を放送するケーブルテレビ局が全国に続々と誕生していった。平成三年（一九九二）に「とこなめニューテレビ」として開局した知多半島ケーブルネットワーク（以下、CCNC）もそのひとつである。

さて、各家庭に映像を送る「動脈」であるケーブルそのものは、どんなものなのだろうか。それは、銅線を芯とした「同軸ケーブル」と呼ばれるものだ。銅線を絶縁体で包み、その周りを網状の金属繊維で覆い、さらにそれを塩化ビニールなどで覆っている。このようながっちりした構造のため、外部から電磁波の影響を受けることが少なく、またケーブル内から外へ信号が漏れにくい。ゆえに、安定して家庭のテレビに番組を送ることができるのだ。

そして今、開局以来長年にわたりケーブルテレビを支えてきたこの同軸

CCNCのあゆみ

平成 2年(1990) 2月	株式会社とこなめニューテレビ設立
平成 3年(1991) 10月	第一期開局
平成 4年(1992) 4月	第二期開局で市内全域に供用開始
平成11年(1999) 10月	株式会社美浜ニューテレビ、 株式会社南知多ニューテレビ開局
平成12年(2000) 10月	株式会社武豊ニューテレビ開局
平成17年(2005) 7月	4社が合併し 「知多半島ケーブルネットワーク株式会社」設立
平成19年(2007) 4月	新本社ビルが常滑市かじま台にオープン
平成22年(2010) 9月	地域情報誌「コナッツクラブ」創刊
平成28年(2016) 3月	知多メディアネットワーク株式会社が親会社となり、 CNCIグループに加入
平成30年(2018) 12月	光サービス「ちった光」開始



とこなめニューテレビ開局（平成3年）



美浜・南知多ニューテレビ開局（平成11年）



武豊ニューテレビ開局（平成12年）

日進月歩のテレビテクノロジーが世界を変えていった

新しい時代を見据えてケーブルテレビも進化を続ける

光ケーブル導入によって何がよくなるのか。ひとつは「4K8K放送」にも対応できることである。

最近よく耳にする4K8Kというのは、現行の「フルハイビジョン」の次世代型のデジタル放送技術だ。「スーパーハイビジョン」とも呼ばれ、高精細・高画質で大画面でも美しく迫力のある映像が再現できる。今年十二月からNHKと民放各社で放送が始まり、総務省は東京オリンピック・パラリンピックが開催される二〇二〇年までに全世帯の五十パーセントが4K放送を視聴可能にする目標を定めている。

近い将来、テレビはスーパーハイビジョンが主流になっていくだろうが、これを有線で家庭に届けるのに従来の同軸ケーブルは送信容量が小さすぎて使えない。そこで光ケーブルの出番と相成ったわけである。

従来どおりフルハイビジョン放送は続けられるので、視聴者は今までと変わりなくテレビを楽しめる。要は今後、選択肢が増えるということだ。今回、CCNCが光ケーブルを敷設するのはお客様へより多彩なサービスを提供するための、未来への布石である。

利点はテレビに関してだけではなく、インターネット通信も今まで以上に快適になるという。ケーブルテレビとインターネットはいわば「親戚」のよう

地域に根差したケーブルテレビが新時代の放送と通信を担う

素材としての特徴は、従来の同軸ケーブルよりもケーブルが細くて軽量であること。そして技術面での特徴は、より大容量の情報を高速で伝送でき、遠距離でも中継せずに伝送できるという点だ。近年は価格も廉価になり、敷設にかかるコストも大幅にダウンしている。同軸ケーブルの老朽化が懸念されるなか、ボタンタッチにはいい頃合いでもある。

光ファイバーとは、ガラスファイバーを用いた通信ケーブルのこと。同軸ケーブルが電気信号で映像を伝送するのに対し、光ファイバーは光の点滅によつて伝送する。昭和三十〜四十年代に発明・実用化され、昭和五十年代には世間にその名が知られつつあった。筆者が小学生だった昭和五十年代の終わり頃には、「新しい時代の通信を担うモノ」として子供向け科学雑誌の付録に付いていた記憶がある。

ケーブルを、光ファイバーのケーブルに変えるプロジェクトがCCNCで着々と進められている。

同軸ケーブル(上)と光ケーブル

どの世代もが、もっともっと楽しめるケーブルテレビに



撮影協力◎大府市歴史民俗資料館／木と土と風の家 家工房
参考文献◎放送技術80年のドラマ〜ラジオ、白黒TV、そして地上波デジタル放送へ（村瀬孝矢、林正儀／毎日コミュニケーションズ）／
ケーブルテレビのすべて（西正、野村敦子／東洋経済新報社）

な関係で、インターネットが普及しつつあった一九九〇年代末からケーブルテレビ事業者はインターネット接続サービスに乗り出していた。CCNCでも、とこなめニューテレビ時代の平成十二年（二〇〇〇）から行っている。これも光ケーブルが導入されることによって、今まで以上に快適にインターネットが使えるようになる。

CCNCでは光サービスを今年十二

月三日から開始するために、今、光ケーブルの設置工事をエリア全域で進行中だ。最終的には全長593キロの光ファイバー幹線網ができていく。そして十二月からは、家庭に光ファイバーを引き込む工事も順次行われる。

最後に、ニュースCCNCのアナウンサーとしておなじみ、またケーブルガールズの一員としても活動している地域情報課の柴田かごめさんに登場

願おう。柴田さんは平成六年（一九九四）生まれで入社二年目。冒頭に記した昭和のテレビの話などまったく通じないだろうが、彼女たちの世代こそ次の時代の放送、通信、そしてコミュニティの担い手だ。

「CCNCではこのサービスを『ちった光』と名付け、これから本格的なプロモーションを展開していきます。この名称は、イタリア語で『まち』を意味する

chitta（ちった）と知多半島をかけ、光サービスによって地域の活性化につなげたいという思いを込めています。十二月からは家庭に光ファイバーを引き込む工事も順次行われますので、皆様にご理解いただけるようご説明させていただきます。『ちった光』にぜひご期待ください」。